

1 安全性の確認指標

	分析名称	考え方・留意点	求め方 (後に×100%)	良くない状況	普通	良い	悪い場合の対処策	業務改善の具体策
①	流動・比率	安全性を測定する上で分析指標上、最強ツールの一つ。流動資産を流動負債で割るだけ。	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}}$ (負債下です。)	100%以下	100%超 ~130%	170%超	流動資産を増やし、流動負債を減らす。	改善は難題です。一般に売上(売掛)が増加すれば仕入(買掛)も増加します。固定(1年以上)借入や資本の増加も簡単にはいきません。遊休固定資産売却実施など。(但し、現在より取得時の方が高い土地などの売却は注意。)
②	当座・比率 (流動比率よりも厳格)	当座といっても当座預金ではありません。流動資産から棚卸資産を除いたものが分子となります。	$\frac{\text{当座資産}}{\text{流動負債}}$ (負債下です。)	-	流動比率とともに、100%以上が望ましい。	-	100%超の状態は流動負債を支払える状態にあることを示す。	-
③	自己資本・比率 (自己資本とは資本金・法定準備金・剰余金)	総資産中に含まれる。返済の必要のない自己資本の割合。	$\frac{\text{自己資本}}{\text{総資産}}$	30%未満 (他人資本増加)	30%以上は確保されたい。	-	自己資本の増加。他人資本の削減。	改善は難題です。借入返済のための資金を入手しましょう。借入・社債の早期返済、償還など。増資・固定資産売却など。
④	固定・比率	固定資産への投資が返済の必要のない自己資本でおこなわれているかどうかを見る指標	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資本}}$	100%超の場合は長期適合もチェック	-	理想は100%以下	-	大規模な製造設備を所有する製造業者などはこの比率が厳しくなります。
※1	固定・長期・適合率 (流動比率を故意に長期の立場で見た指標)	固定資産への投資を長期資金で行っているか。	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資本}+\text{固定負債}}$ (流動資産/流動負債以外→固定資産/(自己資本+固定負債))	100%超は財務バランスが良いとは言えない。	普通は80%前後	-	増資・長期借入で改善するなど。	補足)固定比率が100%以下なら固定資産全てが自己資本調達です。でもなかなか理想は実現が困難なので、限界を補うために考えられた比率がこの比率です。

2 収益性の追求

(※初めの言葉が分母と覚える)

	分析名称	考え方	求め方 (後に×100%)	良くない状況	普通	良い	悪い場合の対処策	業務改善の具体策
①	総資本・経常利益率	会社にある全ての資本(総資本=総資産)を使っていくらの利益が発生しているかをみる比率と考えます。	$\frac{\text{経常利益}}{\text{総資本}}$	6%未満 (最低、定期預金の利息水準を上回る努力を目安としましょう。)	6%~10%	10%超	総資本の増加率よりも売上の増加率の方が上回り、さらに経常利益の増加率がそれを上回るように改善を目指します。	新規設備投資は徹底した無駄の排除。既存の設備の処分を同時に並行して行う。余剰資産を単に売却する。それを債務返済に充当するなど。
②	総資本・回転率	総資産を使ってどのくらいの売上を上げたかを比率で考えます。	$\frac{\text{売上高}}{\text{総資本}}$		回転数が大きければ大きいほど良いと考えます。		総資本・売上を一定に保ち経費を削減させ経常利益を増加させる。	人員の整理をし率の増加を目指す。これは法的準備や退職金準備に時間とコストがかかることを想定しておかなければならないなど。
③	売上高・経常利益率	売上のうちどれくらいが経常利益として計上されているかを比率で考えます。	$\frac{\text{経常利益}}{\text{売上高}}$	%が大きければ大きいほど良いと考えます。	平均5%	目標20%	売上・経常利益を一定に保ち総資本を減少させるなど。	
④	経営資本・経常利益率	①と②の「総資本」を「経営資本」に置き換えます。これは総資本の中から売上と直接関係しない項目を除いた合計を分母にするものです。	$\frac{\text{経常利益}}{\text{経営資本}}$	投資等の貸付金・有価証券・繰延資産などを控除する。			上記より鮮明で厳密な収益性が測定できるのが特徴。	

3 効率性の追求

	分析名称	考え方・留意点	求め方	悪	普通	良い	悪い場合の対処策	業務改善の具体策
①	棚卸資産・回転率	個々の製品・商品ごとに計算するのが望ましい。できない場合は部門やグループごとに行う。過年度と比較して傾向を探る。	$\frac{\text{売上高}}{\text{棚卸資産}}$	回	-	-	回転率が低いものを処分・排除する。一般的に、回転率が高い商品は利益率が低く、逆に回転率が低い商品は利益率が高い傾向にある。	回転率が高いものを中心に仕入れる。新仕入の優先順位は利益率の良いものから。
②	棚卸資産・回転期間	-	$\frac{\text{棚卸資産}}{\text{売上高}}$	×365	-	-	日数がすくなければ少ないほどよい。	無在庫経営は不可能に近い。情報や流通を駆使しながら自社商品の最低最適在庫目安を定期的に見直すことは有効です。
③	交差率 (粗利を各在庫で割る。つまり在庫の粗利に占める割合を高いもの順に把握する考え方。)	商品ごとに把握するのがポイント。売上総利益を商品の各在庫高で割って計算し比べます。	$\frac{\text{売上総利益}}{\text{商品在庫}}$	×100%	-	-	交差率同士を比較し、他とくらべて高い商品程儲かる商品であることを示す。この比率を上げるには、仕入コストを下げるか、売価を上げるかの選択をせまられる。	過剰在庫を避ける。しかし極端に在庫を絞り込むと欠品が生じてしまい、かえって損失を被る危険性があるので注意する。
※	ABC分析	この指標は重点管理を実施する商品を選び出すのに役に立つ。	表とグラフ作成を作成します	-	-	-	商品別の売上高の金額の大きい順番に並べていきます。そのあと、上位80%をA、80%～95%までをB、残り5%をCとします。	Aは品目は少ないが売上構成比が高いはず。Cは品目は多いが、売上構成比が低いはず。Aグループに属する商品を徹底管理
④	(a)売上債権・回転率 (b)売上債権回転期間	資金調達の見直し作業。債権が効率的に回収されているかの確認。通常、売掛金と受取手形に分けて考える。	$\frac{\text{(a) 売上高}}{\text{売上債権(受手・売掛)}} \times 100\%$ $\frac{\text{(b) 売上債権}}{\text{1日あたり売上高(=売上高/365日)}}$	-	-	-	回収不能債権の増加の把握。支払条件変更による長期化や手形のジャンプを把握。支払条件は相手企業との力関係の影響を受ける。回収期間縮小は課題の一つ。	債権の過年度の傾向を把握する。債権管理体制の強化。与信管理体制の強化。営業方針の見直し。